

『触れる - 触れられる』体験がもたらす看護学生の主観的反応

近藤 誓子¹⁾ 佐藤 尚子²⁾

¹⁾ 足利工業大学看護学部 ²⁾ 足利工業大学非常勤演習補助教員

要旨

【目的】本研究は、看護学生が背部のタッチ/マッサージを実施する側とされる側の両方を体験することで、『触れる - 触れられる』の主観的反応を明らかにすることを目的とする。

【方法】演習終了後レポートから「人に触れての感じ方」「人に触れられての感じ方」として書かれている内容を抽出しデータ化し、意味内容の類似性に沿って分類しカテゴリを命名した。

【結果】「人に触れての感じ方」は6カテゴリ、「人に触れられての感じ方」は7カテゴリが抽出できた。

【結論】『触れる』学生は手掌、『触れられる』学生は背部の「温かさ」を実感していた。『触れる』学生の行為は『触れられる』学生の感覚を刺激し、『触れられる』学生の感覚は『触れる』という行為をしている学生の手を媒介にしてリラックス効果をもたらした。タッチ/マッサージは、看護研究をするうえで重要な役割を果たし得ることが示唆された。

キーワード：触れる - 触れられる体験、タッチ/マッサージ、主観的反応、看護学生

I. はじめに

保健師助産師看護師法には、看護師は、療養上の世話または診療の補助を業務とすることが規定されている。療養上の世話や診療の補助は、看護技術として看護や治療を必要とする患者に提供される。その際、看護者が常に念頭においていることは『安全』『安楽』『自立』『個性性』ということである。

近年、患者の精神的安寧や苦痛を緩和することを目的に『安楽』を促進する看護技術が注目されはじめた。2002年「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」の報告¹⁾には『看

護基本技術』の学習項目のなかに安楽確保の技術としてリラクゼーション、指圧、マッサージ等が含まれた。その到達水準はIであり、教員や看護師の助言・指導により学生が単独で実施できるとある。

2005年にタッチング（タッチと同義語である）、マッサージは以下のように定義された。タッチングは「看護者の手で患者の身体の一部に触れること」²⁾であり、マッサージは「手指・手掌を用いて、体表に持続的・反復的な圧を加えたり、さすったりすること」³⁾である。また、川原らは「タッチ/マッサージは患者の安心や

安楽を図ることを目的として看護者が意図的に身体的接触を図るものであり、手を当てる、さする、揉む、圧迫するなどの方法によって行われるもの、非言語的コミュニケーションの一つであり、痛みを軽減し、安楽にする技術⁴⁾と定義している。看護師は患者の身体的苦痛や心理的苦悩を少しでも緩和するために、意識する・しないに関わらず、『触れる』行為として、タッチングやマッサージを日常的に行っている。それは、看護者の「手」を媒介として、直接他者に『触れる』行為として表現される。『触れる』とは、「そのものに直接した結果、即座に何かを感じ取ったり、何かが交流したりする」⁵⁾ことである。タッチングやマッサージの研究では、認知症高齢者に現れている不安を軽減し心地よい睡眠につながった^{6),7)}、低出生体重児の生理機能や発達を促進した⁸⁾、がん患者の疼痛緩和が図られた⁹⁾などの効果が明らかにされている。

一方、看護師は患者に意図的に『触れる』ことで、患者の状態を観察し、自立へと支援することができる。だが、近年の医療機器の導入により、電子血圧計やモニター等の医療機器での結果を過信し、患者の身体に『触れる』ことが減っていることに警鐘をならしている^{10),11)}。

現代の学生を見ていると、他者とのコミュニケーションが希薄で、他者に意識して触れるという経験が少ないように見受けられる。接触行動研究¹²⁾によると、日本人は非接触文化であるとされている。また、スキンシップ許容度¹³⁾の研究では、日本人大学生はスキンシップを許容する程度が低く、物理的コミュニケーション距離が広いことが推察されている。さらに、臨地実習において、看護学生が受け持ち患者と出会った時の距離感が、その後実施したタッチにおける効果の良否に影響したとの報告もある¹⁴⁾。

看護師は24時間、患者が疼痛で苦しんでいるときや辛いとき、不安を感じているとき、患者の傍らに寄り添う。看護の看は、「手」と「目」で構成されている。看護師には自身の「目」で患者をしっかり観て、自身の「手」を使って患者の心身を癒す役割がある。先にも述べたよう

に、患者を触れて癒す手当ては看護学生にも求められていることだろう。筆者は、患者に寄り添うことができる学生を育てたい。そのためには、「触れる」ことの重要性を認識してもらいたい。患者のベッドサイドに行き、言語的なコミュニケーションをとるだけではなく、非言語的なコミュニケーションに注目し、患者の身体にそっと触れられる看護師になってほしい。

看護学生は他者に『触れる』際、どのように感じているのだろうか。また、反対に『触れられる』学生はどのように感じるのだろうか。筆者は看護学生が看護技術を学習する際、『触れる-触れられる』ことは、その人にとってどのような意味を持つのか、つまり、手の有用性について学習してもらいたいと考え日々の授業を実践している。その最初の一步として、看護技術を学び始める初期の学生が、『触れる-触れられる』体験を通して、お互いがどのように感じたのかを本研究で明らかにしていきたいと考えた。

Ⅱ. 研究目的

本研究は、看護学生が背部のタッチ/マッサージに触れる側と触れられる側の両方を体験することで、『触れる-触れられる』の主観的反応を明らかにし、看護技術教育の基礎資料とすることを目的とする。

Ⅲ. 用語の定義

『触れる-触れられる』とは、看護師(学生)は患者の身体の一部に触れることで、患者の苦悩や苦痛を受け止めることである。また、患者は看護師(学生)が受け止めてくれた苦悩や苦痛を自分1人で抱え込まなくてもよいことを察知し、快の感情を持つ、とした。

タッチ/マッサージとは、看護師(学生)が意図的・無意図的に関わらず患者の身体に触れる(手を当てる、さする)ことで、患者の安心や安楽が図れる、とした。

IV. 研究方法

1. 授業の紹介

1) 科目名：看護技術演習 I（生活の援助）

2) 対象学年：1 年次生 120 名

3) 科目の位置づけ：看護技術演習 I は 1 年次後期に組み込まれており、必修 2 単位 60 時間の授業である。学生にとっては初めて看護技術を学習する授業となっている。本授業は、1 単元ごとに講義が終了したあとに、引き続き、その講義で学習した技術の演習を行い、看護技術の基本型を身につけられるようにしている。演習時は 2 クラスに分け、教員は 4～5 名で学生指導にあっている。また、授業は看護技術に共通する基本技術と生活の援助技術で構成している。タッチ/マッサージは、看護技術に共通する基本技術に位置づけ、2 回目に講義・演習を行った。

2. 研究デザイン

質的研究

3. 実施方法

人に『触れる - 触れられる』という演習の機会がまだ少ない 1 年次生を選定することで、よりリアルに『触れる - 触れられる』の主観的反応が出現しやすいと考えた。また、皮膚に触れるだけでは主観的反応が現れにくいと考え、タッチ/マッサージを導入することにした。タッチ/マッサージを実施する部位は主に手や足、腰背部で行われているが、今回は日本福祉研究所のタクティールケア[®]で実施されている背部で行うことにした。その理由は、①背部の手順がわかりやすく図で示されていたこと¹⁵⁾、②手軽にできること、である。

学生にタッチ/マッサージの目的や方法を説明した後、2 人一組のペア（男女別）を作ってもらった。触れ方に関しては、背部のタクティールケア[®]の手順を参考にして教員が行う手技を一工程ずつに分けて学生に模倣してもらった。その際、『触れる』学生は両手の手掌を『触れられる』学生の背中に密着させ、微妙な力加減でゆっくりと、背中全体をやわらかく包み込むように皮膚に触れていくことを説明した。また、手掌を皮膚に密着させる時は、指は重ならない、

指と指の間は開かないことも付け加えた。実施中の私語は慎むこと、さらに、開始する前には『触れられる』学生に了解を得、終了時にはねぎらいのことばをかけることを説明した。

タッチ/マッサージは、『触れる - 触れられる』人の距離が非常に近くなるため、不快な感情をおこさないように行うことが大切である。『触れられる』学生には、触れられることが苦手な人は無理をしないこと、途中でくすぐったさを感じた人は中止してよいことを説明した。注意事項を説明した後、『触れられる』学生は、椅子に座ってオーバーベッドテーブルや床頭台、ベッドに伏せた状態（枕を使用）になってもらった。『触れる』学生は『触れられる』学生の背後に位置し、挨拶をしてから背部のタッチ/マッサージを実施した。1 組目が終了したら役割を交替し同じことを繰り返した。実施している時は、両者がリラックスできるよう静かな音楽を流し、『触れる』学生がタッチ/マッサージの流れがわかるように自作の映像を流しながら行った。

4. データ収集

データは、研究協力に同意を得られた学生が自由記述した用紙である。

5. データ分析方法

「タッチ/マッサージを体験して感じたこと」を自由記述してもらった。その中で、「人に触れての感じ方」「人に触れられての感じ方」として書かれている記述内容を抽出しデータ化した。データ化した記述内容の文脈単位から記録単位に分割し、各記録単位に番号をつけた。ベレルソンの内容分析の方法¹⁶⁾を参考に、意味内容の類似性に沿って分類しカテゴリを命名した。共同研究者間において検討を重ね、内容の妥当性と命名の信頼性を確保した。

IV. 倫理的配慮

本研究は日本保健医療大学研究倫理委員会において承認を得ている。学生には、演習後に本研究の目的や個人情報を守ることを、研究協力は任意であること、成績には関係しないこと、得られたデータは数量的に処理すること、自由

表1 人に触れての感じ方

n = 12名

カテゴリ	サブカテゴリ	記述内容
温かさ実感 (6)	温かい実感 (3)	温かかった。温かいと思った。人の背中では想像以上に温かかった。
	自分も温まった実感 (3)	自分の体温と相手の体温が調和しているような感覚だった。自分の手も温かくなってきた。自分の手も温まって体がぼかぼかしてきた。
相手を思いやる実感 (3)	「気持ちが良い」と言われ「もっと気持ち良くなってもらいたい」実感 (2)	相手から「気持ちいい」と言われてうれしかった。「気持ち良い」と言ってもらえるとすごく喜びを感じ、もっと気持ち良くなってもらいたいという気持ちが強くなった。
	優しい気持ちになる実感 (1)	相手に触れると優しい気持ちになった。
気持ちが落ち着き眠気を感じる実感 (2)	気持ちが落ち着く実感 (1)	人の肌に触れていると、自分も気持ちが落ち着いてきた。
	眠気を感じる実感 (1)	やられている時より、やっている時の方が眠気を感じた。
背中の広さ・骨格の実感 (5)	背中の広さ実感 (3)	人の背中の広さを改めて実感した。人の背中って意外と広いなと思った。人の背中では意外と広い。
	背中の骨格実感 (2)	その人の骨格がわかる。背中をすみずみまで触れて、何がついているかを知ることができた。
手技を提供した体験 (5)	人の背中を触れる時の力加減実感 (2)	1対1で触れると力加減に敏感になるものかなと思った。10分間、人の背中に触れ続けていると、手がだんだんビリビリと痺れるような感じがした。
	相手の体に沿って触れることの実感 (1)	腕だけ動かして触れるのではなく腰から全体を使って、相手の体に沿って触れていくことでよりびったり調和できると感じた。
	慣れない手つきで実施することの不安 (1)	最初は慣れない手つきで、マッサージされている人が気持ちよと思ってきているか不安だった。
	実施する際、聞くことの大切さ実感 (1)	くすぐったくないか、恥ずかしくないのかを聞くようにしないといけない。
BGMの効果実感 (1)	BGMを流すと落ち着く実感 (1)	静かで歌が入っていないBGMを流してやっているとすごく落ち着いた気持ちになった。

() は記録単位数

記述した用紙の投函をもって、本研究への参加に同意を得られたものとすることを書面と口頭で説明し、承諾を得た。

V. 結果

学生120名中、12名から回答があった。「人に触れての感じ方」(表1)は22記録単位が抽出され、6カテゴリに分類できた。「人に触れられての感じ方」(表2)は37記録単位が抽出され、

7カテゴリに分類できた。以下、カテゴリを【】で示し、()は記録単位を表す。

「人に触れての感じ方」のカテゴリは【温かさ実感】【相手を思いやる実感】【気持ちが落ち着き眠気を感じる実感】【背中の広さ・骨格の実感】【手技を提供した体験】【BGMの効果実感】である。【温かさ実感】は「温かい実感」(3)と「自分も温まった実感」(3)の2つから形成されていた。【相手を思いやる実感】は「『気持ちが良い』

『触れる - 触れられる』体験がもたらす看護学生の主観的反応

表2 人に触れられての感じ方

n = 12名

カテゴリ	サブカテゴリ	記述内容
気持ち良く眠くなった実感 (9)	眠くなった実感 (3)	眠くなった。眠気が襲ってきた。眠くなる。
	気持ちが良かった実感 (6)	とても心地よかった。心地がよかった。眠れそうなくらい気持ちがよくなった。気持ち良くなった。とても気持ちが良かった。とても気持ちが良かった。
触れた人の手の温度が伝わる実感 (11)	人の手の温かさが伝わる実感 (7)	看護師役の人の温度が伝わってきてとても心地よかった。 触れられている部分がすごく温まって、ぼかぼかした。時間がたつにつれ、身体の表面だけでなく中から温かくなってきた。人に触れられることは、とても温かいと感じた。 触れた人の手が、とても温かく感じた。人の温もりを感じる事ができた。
	温かかった実感 (4)	温かい。とても温かいと思った。あったかい。とても温かかった。
リラックスできた実感 (4)	リラックスできた実感 (4)	相手の手のひらの温かさでリラックスできた。リラックスすることができた。とても、リラックスすることができた。リラックスできる。
安心感があり、もっと触れられていたい実感 (5)	安心感がある実感 (3)	安心感があった。人の手って、安心できるものなのだと感じた。安心した。
	もっと触れられていたい実感 (2)	10分だけでなく、長い時間やってほしいと感じた。10分間という時間があったという間で、もっと触れられていたいという思いが残った。
手技を受けた体験 (6)	触れられての要望 (2)	背中だけでなく、肩や腰の方まで幅広く触れてもらおうとリラックスできる。ソフトに触れているだけに、とても気持ち良く、リラックスできた。
	くすぐったさ体験 (3)	わき腹などは少しくすぐりたい。くすぐりたい。くすぐりたい部分もあった。
	相手のあせりが伝わる体験 (1)	相手があせってペースを速め、力を入れてしまうと、すぐ相手のあせりが背中から直に伝わる。
BGMの効果実感 (1)	BGMが流れると落ち着く実感 (1)	静かで歌が入っていないBGMを流していると、すぐ落ち着いた気持ちになった。
自分の背中のおおきさ実感 (1)	自分の背中のおおきさ実感 (1)	自分の背中のおおきさを知った。

() は記録単位数

と言われ、『もっと気持ち良くなってもらいたい』実感(2)と「優しい気持ちになる実感(1)の2つから形成されていた。【気持ちが落ち着き眠気を感じる実感】は「気持ちが落ち着く実感(1)と「眠気を感じる実感(1)の2つから形成されていた。【背中のおおきさ・骨格の実感】は「背中のおおきさ実感(3)と「背中のおおきさ実感(2)の2つから形成されていた。【手技を提供した体験】は「人の背中を触れる時の力加減実

感(2)と「相手の体に沿って触れることの実感(1)、「慣れない手つきで実施することの不安(1)、「実施する際、聞くことのおおきさ実感(1)の4つから形成されていた。【BGMのおおきさ実感】は「BGMを流すと落ち着く実感(1)から形成されていた。

「人に触れられての感じ方」のカテゴリは【気持ち良く眠くなった実感】【触れた人の手の温度が伝わる実感】【リラックスできた実感】【安

心感があり、もっと触れられていたい実感】【手技を受けた体験】【BGMの効果実感】【自分の背中の大きさ実感】である。【気持ち良く眠くなった実感】は「眠くなった実感」(3)と「気持ち良かった実感」(6)の2つから形成されていた。【触れた人の手の温度が伝わる実感】は「人の手の温かさが伝わる実感」(7)と「温かかった実感」(4)の2つから形成されていた。【リラックスできた実感】は「リラックスできた実感」(4)から形成されていた。【安心感があり、もっと触れられていたい実感】は「安心感がある実感」(3)と「もっと触れられていたい実感」(2)の2つから形成されていた。【手技を受けた体験】は「触れられての要望」(2)と「くすぐったさ体験」(3)、「相手のあせりが伝わる体験」(1)の3つから形成されていた。【BGMの効果実感】は「BGMが流れると落ち着く実感」(1)から形成されていた。【自分の背中の大きさ実感】は「自分の背中の大きさ実感」(1)から形成されていた。

VI. 考察

「触れる－触れられる」は自律神経系へ作用する。1秒間で5cmの速度でゆっくりとやさしく皮膚をなでる¹⁷⁾と、副交感神経が優位となり「気持ちいい」と感じるという。本研究の「人に触れての感じ方」「人に触れられての感じ方」のカテゴリを見ると、「気持ちいい」は、1. 触れた人の手の温かさを感じ眠気を感じたこと、2. リラックスできたこと、である。そして、3. 触れられていることへの安心感、相手にも気持ちいいを体験してもらいたいという相互性、の3点にまとめることができた。「温かさ」、「リラックス」、「相互性」について考察する。

1. 「温かさ」

「人に触れての感じ方」のカテゴリ【温かさ実感】では、「温かい」と記述した学生がいた。『触れる』学生はゆっくりと決められた流れに沿って皮膚に触れたことから、「交感神経の興奮を減少させ、皮膚の血管が拡張することによって循環を促進」¹⁸⁾し、皮膚表面の温度が上がったのではないかと考える。また、「自分の体温と

相手の体温が調和しているような感覚だった」「自分の手も温まって体がぼかぼかしてきた」と記述した学生もいた。これらの記述は、触れている学生の緊張をほぐし、リラックスしてきたということである。『触れる』という行為は、手を媒介にして『触れる』学生自身の気持ちを反映しているのではないかと推察した。

「人に触れられての感じ方」のカテゴリ【触れた人の手の温度が伝わる実感】では、「触れた人の手が、とても温かく感じた」「触れられている部分がすごく温まって、ぼかぼかした」と記述していた。「体表温度は施術前と比較して有意な差があり上昇した」¹⁸⁾との報告があり、『触れる』人の手の温かさが『触れられる』人の背中へと伝わり記述されたのではないかと考えた。また、「看護師役(実施者)の人の温度が伝わってきてとても心地よかった」「人の温もりを感じる事ができた」と記述している学生もいた。『触れられる』感覚は、『触れる』行為をしている学生の手を媒介として、温かさが伝わり心地よく感じたのではないかと推察した。

2. 「リラックス」

「人に触れての感じ方」のカテゴリ【気持ちが落ち着き眠気を感じる実感】の記述内容には、「人の肌に触れていると、自分も気持ちが落ち着いてきた」「やられている時より、やっている時の方が眠気を感じた」と書かれている。また、「人に触れられての感じ方」のカテゴリ【気持ち良く眠くなった実感】【リラックスできた実感】の記述内容には、「眠くなった」「とても気持ち良かった」「相手の手のひらの温かさでリラックスできた」と書かれている。これらは、オキシトシンが関与していると言われている。オキシトシンは脳の視床下部で産生されるホルモンとして身体の様々な器官に届く^{19),20)}。オキシトシンを分泌させ、コルチゾールを低下させて安心感をもたらす²¹⁾。また、タッチングによって、リラックス傾向を示すα波が僅かではあるが増加している²²⁾ことを明らかにした研究がある。皮膚と皮膚を接触させ、さらにゆっくりと動かすことによって、『触れる』人の手やゆっ

たりしたりリズムで『触れられる』人の背中では温かさを実感している。温かさを感じることで触れられた人の気持ちは落ち着き、それが眠気を誘発し、リラックス効果が得られたのではないかと推察する。

3. 「相互性」

「人に触れての感じ方」のカテゴリ【相手を思いやる実感】の記述内容には、「『気持ち良い』と言ってもらえるとすごく喜びを感じ、もっと気持ち良くなってもらいたい」と書かれている。「人に触れられての感じ方」のカテゴリ【安心感があり、もっと触れられていたい実感】の記述内容には、「人の手って安心できるものなのだ、もっと触れられていたい」と書かれている。『触れる - 触れられる』行為は、触れる側から触れられる側に何かを送り、触れられた側がそれに反応することで触れる側もまたそれを受け取る²³⁾ 相互行為と言える。そのうえ、オキシトシンには、触れられた人だけが得るものではなく、触れている人も得られる¹⁰⁾ ことが明らかにされている。看護者は、患者の心身の苦痛を少しでも理解するために、その人の言動や表情、さらに触れることを通して、その人の心情をくみ取ろうとしている。それは、看護学生に要求されていることでもある。ヘンダーソンは著書のなかで、患者の“皮膚の内側に入り込む”²⁴⁾ ことの重要性を述べている。『触れる』ことは単に皮膚と皮膚との接触ではなく、より深く患者を理解するための行為であると筆者は認識する。触れられて気持ちよと感じた学生は、それを素直に言葉で表現し、触れた学生はその言葉を聴くことによって、もっと気持ち良くなってもらいたいと、相互に肯定的な感情へと発展したのだと確信する。

Ⅶ. 研究の限界と今後の課題

本研究の回答者は120名中12名であり、回収率が低かった。当該科目の看護技術演習後、「タッチ/マッサージを体験して感じたこと」を自由記述した用紙の提出をもって本研究への同意が得られたとしたため、回収率が非常に悪くデータの分析や考察には限界があった。今後

はデータの回収率がよくなるように、同意を得るための方法を検討していくことが必要である。また、学内の授業で『触れる - 触れられる』体験をした学生が、臨地実習においてタッチ/マッサージを受け持ち患者に実践したとき、患者・学生双方にどのような気持ちの変化がみられたのかを検証することが今後の課題である。

Ⅷ. 結論

「人に触れての感じ方」は、【温かさ実感】【相手を思いやる実感】【気持ちが落ち着き眠気を感じる実感】【背中の広さ・骨格の実感】【手技を提供した体験】【BGMの効果実感】の6カテゴリに分類できた。「人に触れられての感じ方」は、【気持ち良く眠くなった実感】【触れた人の手の温度が伝わる実感】【リラックスできた実感】【安心感があり、もっと触れられていたい実感】【手技を受けた体験】【BGMの効果実感】【自分の背中の大きさ実感】の7カテゴリに分類できた。上記の結果から以下の結論が導き出された。

1. 『触れる』学生は手掌、『触れられる』学生は背部の「温かさ」を実感していた。
2. 『触れる』学生の行為は『触れられる』学生の感覚を刺激し、『触れられる』学生の感覚は『触れる』という行為をしている学生の手を媒介にしてリラックス効果をもたらした。
3. タッチ/マッサージは、看護研究をするうえで重要な役割を果たし得ることが示唆された。

文献

- 1) 文部科学省. 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて. 2002.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm (2015年11月11日参照)
- 2) 日本看護科学学会看護学学術用語検討委員会編. 看護行為用語分類. 日本看護協会出版会; 2005. 167.
- 3) 前掲書 2), 189.
- 4) 川原由佳里, 奥田清子. 看護におけるタッ

- チ/マッサージの研究 文献レビュー. 日本看護技術学会誌. 2009;8(3):91-100.
- 5) 金田一京助, 柴田武, 山田明雄, 他. 新明解 国語辞典. 三省堂;1995. 1151.
- 6) 春日邦江, 木村晴美, 中村美樹, 他. タクティールケアが睡眠に及ぼす効果の検証ー脳血管性認知症患者への介入ー. 日本看護学会論文集成 成人看護Ⅱ. 2010;(41): 111-114.
- 7) 萩原裕美, 山下美根子. 認知症患者へのタクティールケアの効果について. 看護実践の科学. 2011; 36(13):58-63.
- 8) 小西真愉子, 兒玉英也. タッチケア/ベビーマッサージの児への臨床的効果とその生理的メカニズムに関する文献検討. 秋田県母性衛生学会雑誌. 2012;25:30-39.
- 9) 藤田里枝, 岡田美登里, 石原辰彦. 終末期がん患者のがん性疼痛に対する意図的タッチの効果. 死の臨床. 2012;35(2):291.
- 10) 川島みどり. 触れる・癒やす・あいだをつなぐ手ーTE-ARTE学入門. 看護の科学社;2011. 2-4.
- 11) 木本明恵. タクティールケアはここで学べる!. コミュニティケア. 2011;13(12):34-37.
- 12) 呉映妍. 接触行動の異文化比較:心理学的研究の展望. 鶴山論叢. 2009;(9):21-37.
- 13) 曹美庚. スキンシップ許容度とコミュニケーション距離ー日本人大学生の分析結果を中心にー. 言語文化論究. 2008;23: 43-61.
- 14) 秋鹿都子, 長崎雅子, 松岡文子. 看護学生のタッチによる看護の質の変化. 島根県立看護短期大学紀要. 2005;11:91-98.
- 15) 木本明恵. 背中と手のタクティールケアの手技. コミュニティケア. 2012;14(14): 72-75.
- 16) 舟島なをみ. 質的研究への挑戦. 医学書院;2007. 42-79.
- 17) 山口創. 手の治癒力. 草思社;2012. 74-77.
- 18) 酒井桂子, 坂井恵子, 坪本他喜子, 他. 健康な女性に対するタクティールケアの生理的・心理的效果. 日本看護研究学会雑誌. 2012;35(1):145-152.
- 19) 前掲書 10), 112.
- 20) 前掲書 10), 135.
- 21) 前掲書 10), 173.
- 22) 森千鶴, 村松仁, 永澤悦伸, 他. タッチングによる精神・生理機能の変化. 山梨医大紀要. 2000;17:64-67.
- 23) 堀内園子. 見て, 試して, 覚える触れるケア 看護技術としてのタッチング. ライフサポート社;2010.
- 24) ヴァージニア・ヘンダーソン. 看護の基本となるもの. 日本看護協会出版会;2006.

Subjective responses of nursing care students brought by “touching - touched” experiences

Seiko Kondo¹⁾, Naoko Sato²⁾

¹⁾ Department of Nursing, Ashikaga Institute of Technology

²⁾ Ashikaga Institute of Technology

Abstract

【Purpose】 The purpose of this study is to reveal the subjective responses of nursing care students by their experiencing both touching/massaging and touched/massaged the backs of other students.

【Method】 Picked out items about “the way one feels about touching another person” and “the way one feels about being touched by another person” from the reports submitted after exercising. Then, created and categorized data on the basis of similarity in their contents.

【Result】 Six categories of “the way one feels about touching another person” and seven categories of “the way one feels about being touched by another person” were successfully obtained.

【Conclusion】 The “touching” students felt warm in their palms while the “touched” students felt “warmth” on their backs. The action of “touching” students stimulated the sense of the “touched” students. Those “touched” students were provided relaxation effects through the palms of the “touching” students. These results may suggest that touching/massaging care may play an important role in nursing studies.

Key Words: Touching-touched experiences, touching/massaging, subjective responses, nursing students